

教員氏名：渡辺 一洋（児童教育専攻／教授）

1. 教育の責任（何をやっているか）

児童教育専攻に所属し、教員免許および保育士資格の取得を目指す学生を対象として、保育内容（表現）や図画工作に関する授業を担当している。また、保育実習に関わる「保育実習指導Ⅰ・Ⅱ（保育所）」「保育実習Ⅰ・Ⅱ（保育所）」、キャリア形成を支援する「インターンシップⅠ」などを担当し、実践力と専門性の育成に努めている。ゼミナールにおいては、1・2年次の担任として学生の学習・学生生活・進路に関する指導を行うとともに、3・4年次の教育学研究法及び卒業研究では、卒業制作および卒業研究付帯論文の指導を通して、学生一人ひとりの関心や専門性に応じた多様な研究テーマに対応している。

さらに、公立・私立の保育所、幼稚園、認定こども園等への就職を目指す学生に対して、採用試験対策や面接指導など、進路希望に応じた個別的なキャリア支援を行っている。課外活動では、JCCクラブの指導を通して、長年にわたり地域貢献活動に取り組んでいる。学生とともに保育技術や児童文化に関する研究・実践を行い、その成果を自主企画事業として発表するとともに、地域の子育て支援団体、行政機関、NPO等と連携しながら、保育や児童文化に関するイベントの企画・運営を継続的に実践している。

現在の主な担当科目一覧		
育英大学	教育学部教育学科	図画工作、初等教科教育法（図画工作）、幼児と表現B、造形表現演習Ⅰ・Ⅱ、保育内容（表現B）の指導法、保育実習指導Ⅰ・Ⅱ（保育所）、保育実習Ⅰ・Ⅱ（保育所）、キャリアプランニング、インターンシップⅠ、教育学研究法、卒業研究など

2. 教育の理念（なぜやっているか）

専門分野を研究するものとしての理念とその背景や経験

私は、造形教育および美術教育を専門分野とし、創作活動と研究活動を並行しながら、理論と実践の両面から教員養成・保育者養成における造形分野の力量形成に関する研究に取り組んできた。研究当初は、絵画制作を中心とした技法や材料に関する研究を主に行っていた。しかし、教員養成や保育者養成に携わる中で、学生自身が造形活動の楽しさや意

義を再発見し、その学びを教育・保育実践や実習、さらには将来の進路へとつなげていくためには、どのような教育的支援や指導方法が求められるのかという課題意識を持つようになった。

こうした問題意識を背景として、研究領域を造形表現そのものの探究にとどめることなく、造形活動を通した学びのプロセスや表現活動の意義、保育者・教員としての資質能力の形成、さらには協働的な表現活動や地域と連携した実践活動へと発展させてきた。現在は、造形表現を媒介とした人間形成や保育者養成・教員養成の在り方について、実践研究を中心に継続的に取り組んでいる。

学生への学習に対する理念

私が担当する教職および保育士養成に関する科目では、幼児の発達段階に応じた表現活動や小学校図画工作科に関わる内容を扱っている。これらの領域では、制作や鑑賞を通して多様な表現を探究する学びが求められることから、学生が豊かな創造力や感性、造形的な見方・考え方を、自らの感覚や表現活動を通して理解できるよう指導している。また、造形活動における材料や用具の特性を理解し、それらを活用した表現方法を工夫する力を育成するため、実技を重視した授業を展開している。さらに、実際の教育・保育現場を想定しながら、子どもの表現を支える指導方法や環境構成の在り方について、具体的な実践事例を交えながら解説し、教育的視点に基づいた実践力の育成を図っている。

社会における大学教育の位置付け

保育者養成及び教員養成に関わる本学の教育は、子どもたちの成長を支える専門職を育成するものであり、社会からの期待と責任は極めて大きい。そのため、専門的な知識や技術の習得に加え、豊かな人間性と実践力を備えた人材の育成が重要であると考えている。

3. 教育の方法（どのようにやっているか）

具体的な教育上の実践や教材の工夫

- ① 演習科目・講義科目ともに PowerPoint を積極的に活用し、基礎的な技法や材料の扱い方、作品制作のプロセスなどを視覚的に理解できる教材を作成している。言葉だけでは理解が難しい内容についても、写真や図表を用いることで理解の促進を図っている。
- ② 実技科目では、保育・学校現場で実際に活用される材料や教材を取り入れ、教育・保育実践を想定した制作活動を行っている。学生が現場で活用できる実践的な知識や技術を身

に付けられるよう努めている。

③ Google Classroom を活用し、作品画像の提出に加え、制作の構想や過程、振り返りを記述したレポートを提出させている。これにより、作品の完成だけでなく、制作過程における学びや気づきについても重視した指導を行っている。

学生との関係構築のための工夫や配慮

授業のまとめとして総合的な理解を確認するレポート課題や、各授業における小レポートを課すことで、学生が学習内容を振り返りながら理解を深められるよう工夫している。また、授業内では制作した作品や作品画像を活用した発表活動を取り入れ、学生同士が互いの表現を共有しながら鑑賞する機会を設けている。これにより、作品のよさや表現の工夫に気付く力を育成するとともに、造形作品を鑑賞する視点や言葉で表現する力の向上を図っている。また、自他の作品を認め合い、それぞれの表現の価値を理解する態度を育むことにも配慮している。

4. 教育の成果（行った結果どうだったか）

学生の学習成果

学生の中には、当初、制作活動に対して苦手意識を抱いている者も見受けられる。しかし、授業を重ねる中で、制作への取り組み方や授業への参加態度に変化が見られ、意欲の向上や表現への積極性がうかがえる場面も多い。また、最終的には制作作品や課題レポート、総括レポートにおいて優れた成果を示す学生も少なくなく、学習目標の達成につながっていると考えられる。これらのことから、授業内容や課題の設定、難易度については概ね適切であると評価している。

学生による授業への評価

授業では、表現に関するイメージを言葉で丁寧に伝えるとともに、理論的な内容についても具体例や実践事例を用いながら説明し、抽象的な理解にとどまらないよう工夫している。その結果、授業評価は概ね全体平均と同程度、またはそれを上回る評価を得ている。

一方で、個別の評価内容を確認すると、学習内容の理解や授業への適応に課題を抱える学生からは、やや低い評価が見られる場合もある。この点は今後の授業改善に向けた重要な課題であると捉えている。そのため、学生からの自由記述をはじめとする個別の意見にも丁寧に目を向けながら、授業内容や指導方法の改善に継続的に取り組んでいきたい。

また、保育者養成及び教員養成に求められる資質・能力の育成を踏まえ、学生一人ひとりの理解を支援しながら、より確実な学習成果の達成を目指した授業づくりを進めていきたい。

5. 教育における今後の目標（これからどうするのか）

短期的な目標

これまでの造形表現や美術教育における教育方法は、今日のアートを取り巻く多様な価値観や表現概念の広がりの中で大きく変化している。特に、情報機器を活用した表現・鑑賞活動をはじめ、「材料」「イメージ」「環境」「行為」「出来事」「場」「共同性」「グローバル化」「社会的創造活動」といった多様な視点から造形活動を捉えることが求められている。

今後は、こうした視点を踏まえながら、幼児期の表現活動から小学校図画工作科までを一体的に捉え、造形活動が子どもの成長や学びにどのような意味と意義を持つのかを明らかにしていきたい。また、その成果を基に、保育者養成及び教員養成における造形教育の授業構想や指導方法について検討を深めていきたいと考えている。今後2～3年を目途に、理論研究と実践研究を往還しながら試行錯誤を重ね、これからの時代に求められる造形教育及び表現教育の在り方について探究していきたい。

中期的な目標

前述した問題意識を踏まえ、将来保育者や教員として表現活動に携わる学生たちが、自らも生涯にわたってアートに親しみ、豊かな感性を育みながら保育や図画工作の実践に取り組むことができるよう支援していきたいと考えている。

そのため、これまでの教育実践や研究活動を通して蓄積してきた資料や実践事例を整理・体系化し、保育者養成及び教員養成に活用できる新たな教材の作成に取り組みたい。また、学生が造形表現の意義や楽しさを実感しながら学ぶことのできる教材開発を通して、教育・保育現場で活用できる実践的な学びの充実を図っていきたい。

【添付資料】 ※全部又は一部の現物を省略しています。

1 担当科目のシラバス

(2026年6月30日現在)